

誰かに教えたくなる 科学技術の話 96

社会に騒動をもたらした バブル事件



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

平安時代末期から鎌倉時代初期を代表する歌人の鴨長明の随筆『方丈記』は『枕草子』『徒然草』とともに日本の三大古典隨筆とされるが、その冒頭は「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と住みかと、またかくのごとし」という万物流転を見事に表現した文章である。

このような諦観が社会には存在する一方、その対極にあるような欲望もまた存在する。その欲望を現実の社会で実現することは容易ではないため、歴史には社会の規範を無視して実現しようとした人々が多数登場する。それらの人々は個人として破綻するだけではなく、多数の人々をも破綻させる結果になり事件となる。そのようなバブル事件に科学技術が関係した事例を紹介する。

チューリップ・バブル

チューリップはアナトリア半島から中央アジアが原産とされ、その地域には多数の野生の品種が生育していた。十七世紀になり、アナトリア半島を本拠とするオスマン帝国から全盛時代であったオラ

ンダに様々な種類のチューリップが渡来し、その栽培が流行したが、球根がモザイクウイルスに感染すると、複雑な模様の花弁が発生し、その模様によつては高値で売買される状態になつた。

次第に庶民も売買に参加はじめ、一六三七年には球根一個の値段が熟練した職人の年収の約十倍になつたという情報もある。現在に比定すると、球根一個が五〇〇〇万円以上で売買されるということになる。最高の値段になつたのはセンペル・アウグストゥス（無窮の皇帝）（図1）で、一六三六年秋には球根一個の値段がアムステルダムの運河周辺の高級住宅一軒の価格と同等になつた。

さらに流行は加熱して現物のないまま売買される空売りまで発生するようになつた。あらゆるバブル経済に共通の特徴で翌年の二月に突然に暴落しはじめ、売買は一気に消滅した。これは歴史に記録

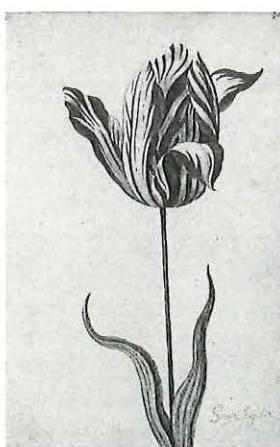


図1 センペル・アウグストゥス

される最初のバブル経済事件とされるが、このような異常事態が発生した背景には、この時期のオランダはアジアとの貿易で繁栄して独立（一六四八）直前で、国家全体が高揚していたこととされる。

南海会社バブル事件

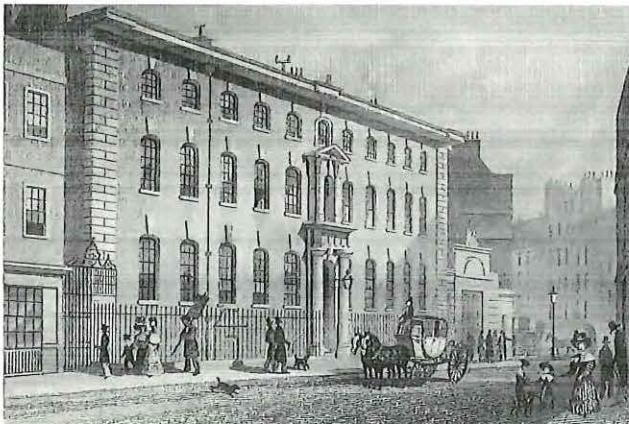


図2 南海会社

十八世紀初頭に財政危機に直面したイギリス政府は国際貿易で経済を再生しようという政策を立案し、一七一年に南海会社（サウス・シー・カンパニー）と

いう国策会社を設立した（図2）。主要な業務はアフリカの住民を奴隸にしてスペインが領有していたカリブ海域の島々に売買することで、この利益によってイギリスの財政を再生することを目指していたが、スペインとの関係悪化や海難事故の発生により苦境になった。

その解決のため一七一八年に富籠を発行したところ成功し、貿易という本業から金融事業に逸脱していく発端になつた。翌年にはイギリス政府発行の公債を購入し、それと同額の株式を発行する許可を取得した。この仕組みはイギリス銀行との競争であつたため本来は無理な状況であつたが、当時の中産階級の人々には資金の余裕があり、投資対象を探索していたため格好の目標になつた。

この株価は一七二〇年一月には一〇〇ポンド、五月には七〇〇ポンド、六月には一〇五〇ポンドという異常な高騰になつたが、政府が規制をしたため一気に暴落した。この余波で南海会社の株価も暴落し、株式を購入した多數の人々が破産し社会問題となつた。余談であるが、当時、造幣局長であつた大科学者ニュートンも購入したが、暴落により大損をしている。

ミシシッピ・バブル

北米大陸の中央を南下する網目のような河川は先住民族の言葉で大河を意味するミシシッピという名前で、世界三位の流域面積である広大な地域は十六世紀からフランスが占領していた（図3）。その広大な地域を開発する目的で十八世紀初頭にミシシッピ会社が設立され、スコットランド出身でフランスの財務総監に就任していたJ・ローが開発の権利を獲得して名称を西方会社に変更した。

当時のフランスは何度かの戦争と国王ルイ十四世の浪費などにより巨額の財政赤字に直面し、通貨の価値は急速に低下



図3 ミシシッピ河

していた。そのような時期の一七一八年にローはフランス王立銀行の総裁に就任し、翌年にはフランスの海外貿易の特権を一手に掌握するミシシッピ会社の総裁になる。そしてミシシッピ流域を開発する拠点として河口にニューオーリンズという都市を建設した。

改名された西方会社はフランス政府から北米とカリブ海域にある西インド諸島との貿易を独占する権利を付与され、いくつかの貿易会社を統合してインド会社となつた。ローの巧妙な宣伝によりインド会社の株式は一気に二十倍に高騰したが、翌年に信用不安が発生して株価は暴落し、ローは解任されてフランス国外に逃亡した。ここまで紹介した事件は史上三大バブル経済とされる。

運河バブル

産業革命を発生させた重要な技術は蒸気機関であるが、それを輸送手段に利用する鉄道が一八二〇年代に実現するまでイギリス国内の重要な移動手段は運河を通行する船舶であり、一七六〇年代から一八三〇年代にはイギリス各地に多数の運河が掘削された。その最初とされるのはイングランド北部のマンチェスター付

近に一七六五年に開通したブリッジウォーターラー運河（図4）である。

この運河は内陸で産出される石炭を港湾まで大量かつ安価に輸送することに効果があり、石炭の価格が半減するほどであつた。この成功により、一七九〇年代からイギリス全土に運河熱狂（キャナル・マニア）と名付けられる流行が発生し、巨額の資金が投入されるようになつた。しかし一九〇五年に開削されたニュー・ジャンクション運河を最後に新規の運河の建設は終了した。

原因は一八二五年にストックトンとダ



図4 ブリッジウォーター運河

鉄道バブル

「レールウェイ・マニア」という英語がある。日本では鉄道を乗車や見物の対象にする熱心な人々を連想するよつた言葉であるが、英語では鉄道を投資の対象として熱中する人々を表現する言葉である。前述のように、十九世紀初期にイギリスに最初の鉄道が実現すると、鉄道路線は一気に増加して鉄道会社への投資が過熱し、同一地域に複数の鉄道が敷設される事態さえ発生した。

この過熱により、最初の鉄道が敷設されてから二十五年後の一八五〇年までにイギリスでは九六〇〇キロの鉄道が敷設された。これは人間の移動を容易にしただけではなく、社会に様々な変化をもたらした。一例が保険業界の繁盛である。

初期の鉄道は意外に危険な移動手段であったため、生命保険会社が傷害保険に進出し、それ以前の海上保険、火災保険、生命保険以外の旅行保険が登場した。このような状況に対応して出現したのが鉄道を利用した団体旅行である。一八五一年にロンドンで世界最初の博覧会が開催されたが、当時は地方の人々が簡単にロンドンに出掛けられる状況ではなかった。そこでT・クックがロンドンへ鉄道で移動する団体旅行を企画したところ

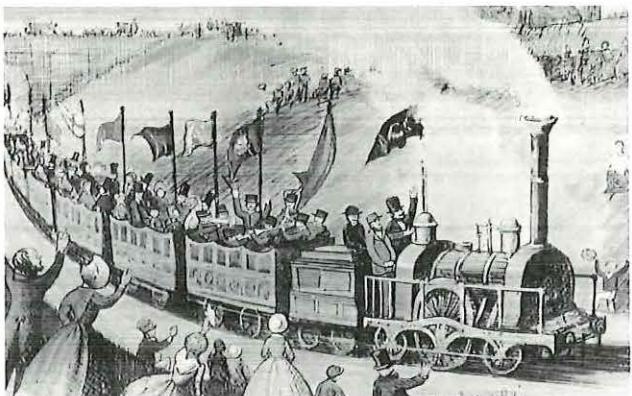


図5 トマス・クックによる団体旅行

人気になり、以後、国内だけではなく海外にも鉄道を利用して観光に出掛ける団体旅行が発展した（図5）。

日本列島改造バブル

一九七二年七月に第六四代総理大臣に就任する直前の六月に田中角栄は自身が総理大臣として実行する構想を『日本列島改造論』という題名の市販の書籍として発表した（図6）。これは新潟という日本の中枢から距離のある日本海側の出身の人間として、全国の地域格差を一気に解消することを目指した日本の再編計画であり、九一万部を売上げ、年間四位のベストセラーとなつた。

明治時代以来の政策によって東京一極集中になつた日本の地域格差是正のため

に、日本列島全域に高速鉄道と高速道路と高速通信のネットワークを整備すると

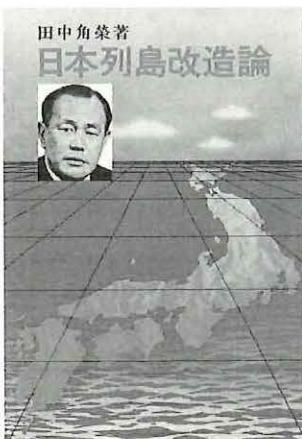


図6 『日本列島改造論』（1972）

今回は十七世紀以後に発生したバブル事件の数例を紹介したが、このような現象は歴史に頻繁に登場している。その後にあるのは人間の金銭や地位や名誉への欲望であり、それを社会に拡散する交通や通信の技術が発展すれば発生は加速する。社会はバブル事件の抑制のために制度や規則を制定しているが、この人間の欲望を抑制する仕組みが発明されなければ、今後もバブル事件は発生する。

ともに、本州と四国を連絡する三本の架橋を建設し、これまで表日本側に集中していた人口と産業を全国に分散させる壮大な構想であった。新潟という明治以来の恩恵を享受できなかつた地域の怨念を一気に噴出させる内容でもあつた。

しかし事前に土地対策が実施されていなかつたために全国で土地の買占めが発生し、札幌では住宅用地が一年で三七%、福岡では二六%も上昇する異常事態となり、その年度の高額所得の上位は土地成金が占有する状態になつた。さらに翌年に発生した石油危機が物価高騰を加速して「狂乱物価」という言葉が氾濫するようになり、このバブル経済からの回復には約二十年という年月を必要とした。